最優秀賞

一般区分

亡き彼女の思い

浦添市

川満　恵作

わたくしには、過去に共通の意思を持った大事な相手がいて、その意思をよく語り合ってもいたのでした。そして、その思い・考えの内容がこうでありました。

障害者にも能力に応じて働く権利は当然あると思う。またその権利は、全ての者に平等でなければならない。よって、障害のある人とない人が、共に働けたら互いに心のふれあいもできるはずなのに。そしたら引きこもりもなく、社会に出て毎日が生きがいと喜びを感じてもらえるのではないかとも思う・・・と。その相手・彼女のそんな思いを絶やすことなく、わたくしどもはそれを継いでいるということです。『心のふれあいと共に生きる』という社会を築く前提として先ず、障害者の方方にも働く権利とその職場を与えてくださるよう何卒よろしくお願い申し上げます。

とそれは、わたくし個人の切望していることでもあります。それからまたさらに世の中には、年金だけで生活している障害者の方もいれば、その年金をも支給されずに援助を受けながら質素な暮らしをしている障害者も決して少なくはないのでは？と、それも彼女の心の中の思いであったのです。それとまた、個々の能力に応じて働きたいという意欲がいくらあっても、それを受け入れてくださる会社・企業がなければ、働く

ことさえ望まれない障害者の方も多多いらっしゃるわけなのであります。そんな方方にしても、病みを抱えながらも生きていくために精一杯努力して頑張っていると思われます。わたくしはこれまで何らかの障害を抱えた大勢の方と出会い、接してもきました。ですから、同じ障害を抱え持つ身のわたくしとしても、その方方の気持ちがよーく分かるのです。しかし、障害者に対して世間の目はどのように映っているのかは知る由もありません。それでも、日常生活において様々な悩みを抱えていた障害者の方方に寄り添いながら相談ごとなどにも乗ってきたわたくしどもとしてはただ、その方たちの心情も痛いほどよく理解できるということです。たとえ身体が不自由でも、魂は尊く輝いて、心は健全であるのです。そしてまた・・・確かにわたくしたちは、それぞれ異なる障害を抱え持ってはおります。それでも、「劣等感が原因で卑屈になる必要はまったく無いと思うし。また私としても、恵さんにいくら障害があっても条件は一緒なんだから、全然気にしてないから。それゆえ、自分の歩み方に自信を持って」と、十二年半前に交際中であった彼女からそう励まされるも重ねて、こうも優しく諭してくれていたのでした。

「障害を持ったことには、必ず意味があり、それは、魂を磨く人生修行でもあるのよ」

と、その教えにわたくしは心から感謝し続けている限りでもあります・・・。しかし、わたくし自身それ以前から思慮していたことは、誰もが望みながら好き好んでそんな身体になったわけではないということです。

ただ、健常者とくらべてつまり、強い個性を持っただけなの

だ。と、ほかならぬ自分自身にもそう言い聞かせてもいたのでした。

よって、持って生まれたそんな個性が独特な方方であるからこそ何らかの優れた能力・才能などが必ず身についているものだとも、わたくしはそう解釈して、その部分を大事にしながらこれからも継続して真心で接していこうと常にそう心掛けている次第でもあります。ですから、その方方を見守っているわたくしどもとしても、先に述べたとおり、一個人の障害者であり・・・。今から六十一年前の昭和三十四年。残暑が続く九月に、このわたくし・川満恵作なる者は、沖縄県西原村（町）にて産声をあげたものの、生後間も無くして疫痢という流行り病に罹ってしまったのです。事実その病は、死亡率が高い伝染病といわれていて、わたくしは生死の境を彷徨っていたのでした。そんな状態に陥っていたのをしかし、神から救われるも、奇跡的に一命を取り留められたのでした。それゆえお陰様でこの歳まで生かされてきたのです。なので、その運命に導いて下さった神様と、育ててくれた両親にどれほど感謝しても全然足りないくらいの気持ちで一杯でもあります。だけど、疾病の後遺症によって、右手に軽度の障害を抱え持ってしまい不自由になってしまったというわけでもあるのです。実際わたくしは、幼少の頃から病弱な体でしたので、小中学校を卒業するも、好きな絵を描いたり随想や小説など書いたりして引きこもりの日々を過ごしてもいました。そして、遅まきながら社会へ出るようになったことで、幾多の試練にも耐え乗り越えてもきましたし。さらに、就職活動にしても障害者ゆえに、並大抵の苦悩ではなかったということです。それでも自分の能力を試す

ため、認められた会社でどうにか勤めることができていたのでした。

だが結局、タクシー会社の乗務員として復職したのが、二十年前の夏頃でありました。

それからしばらくして、人生を左右する事務職員と親しくなったということであります。

ところがじつは、その彼女も身体に軽い障害を抱えていたのです。ゆえに、同じ障害者であるこのわたくしのことを気遣いながらも、お互いの夢を語り合い充実した日々を共に送っていたのでした。それが、身障者同士初めての心のふれあいでありまた、幸せな時間でもあったわけです。しかしそんなある日、突然の交通事故でその彼女を失ってしまい・・・それ以来、悲しみと無念さで毎年旧盆の時期の祥月命日に合わせて心の中で拝むも偲んでいる次第でもあるのです。そして、十三年という月日が経った現在、わたくしは障害者支援事業所にて、得難いことなど学びながら仲間同士和気あいあいと楽しく働かせていただいているところでもあります。それゆえわたくしにも、心のふれあえる仲間が増えたことで、天国から見守ってくれている彼女も喜んでいることだと思われます。